

学界消息

史学研究会関係

昭和三十六年度史学研究会大会

十一月一日(水)、十一月二日(木)

第一日見学会は、予定通り天理図書館・同参考館を見学し、帰途奈良国立博物館で開催中の正倉院展を追加見学した。特に天理参考館は、講師梅原末治氏の懇切な解説のもとに、見学した。

以上望蜀の言をのべさせていたのだが、かかることによつて本書の価値はいささかもそなわれるものではない。本誌の編纂にたずさわれた諸氏に深い敬意を表するとともに、沼津市の発展を祈つて紹介の筆をおきたい。(A5判六四〇頁 昭和三十六年三月 沼津市発行(全三巻))

(原 秀三郎)

河系の文化
——わが国古代における
土地開拓を中心として——
渡辺 久雄

史学研究会二月例会

十二月二日(土) 於京大陳列館第二教室

和泉市史資料調査報告 三浦 圭一

バリ島の農村(スライド使用) 石川 栄吉

国史関係

読史会秋季大会

十一月三日(祝) 於京大文学部第一教室

郡司子弟考 國田 香融

別の実体に関する試論 上田 正昭

近世後期の地主経済 宮下美智子

幕藩体制史研究の課題 藤野 保

京都の蘭学について 山本 四郎

写楽と北斎 三品 彰英

国粹保存主義についての一考察 宮本 又久

仏公使サンクイッチ文書について 彭 沢周

式目註釈書について 池内 義資

日本文化における伝授の一考察 藤 直幹

越前地方の古文書 小葉田 淳

古代日本の水銀文化 松田 寿男
——中国水銀鉱業史研究序説——

三輪伝説についで 肥後 和男

なお終了後、午後六時より東山荘において懇親会を開き、約五〇名が参加した。

日本史研究会大会

於立命館大学 清心館

《個別研究発表》 十一月一八日(土)

中世における村の成立と名 高重 進

譜代小藩々制史の諸問題 佐々木潤之介

——諏訪藩を素材に——

日本反帝同盟運動の問題点 石井金一郎

東アジア史における四・五世紀の日本 藤岡 生大

——帰化人についての一考察——

《共同研究報告》 十一月一九日(日)

共通テーマ「現代における歴史像の再構成」

前近代の部へ日本封建制の史的特質

中世社会の農民 大山 喬平

幕藩領主的土地所有の成立 朝尾 直弘

(補足報告) 日本古代の都市と農村 古代史部会

近代の部へ日本帝国主義と中国革命

日本ファシズム成立の諸前提 江口 圭一

(補足報告) 中国革命と日本外交 小野 信爾

東洋史関係

東洋史談話会大会 十一月三日 午前九時

京都大学人文科学研究所講堂

余棟臣の滅教義軍について 小野 信爾

辛亥革命前後の塩政問題 渡辺 惇

中華革命党の性格をめぐって 寺広 映雄

漢代の郡県制度についての一考察 五井 直弘

天宝以前に於ける唐の軍糧政策 日野開三郎

楊里人をめぐる二三の問題 河内 良弘

突厥東ローマ初期交渉史の一問題 内田 吟風

明代江南の糧長について 小山 正明

伯夷列伝における夷斉説話の意義 伊藤 徳男

中国古刑法、ことに春秋公羊学の刑法理論 仁井田 陞

唐代折衝府文書について 日比野丈夫

京都大学旧制大学院会例会 九月九日(土) 午後一時

陳列館会議室

明代監生の仕官について 谷 光隆

京都大学新制大学院会例会

九月一五日(金) 午前一〇時 陳列館演習室
山西南人を通じて見た清代商業の一考察 狭間 直樹

九月二九日(金) 午後五時 楽友会館

牛李の党争 礪波 護

一〇月六日(金) 午後五時 楽友会館

慧超往五天竺国伝を読んで 小谷 仲男

一〇月二七日(金) 午後五時 神戸屋

ジュンガル勃興史 若松 寛

十一月一〇日(金) 午後五時 楽友会館

明代哈密王家考 永元 寿典

十一月二四日(金) 午後五時 楽友会館

『東洋史研究』第二〇巻二号合評会

京都大学人文科学研究所記念公開講演

十一月一日(土) 午後一時 本館講堂

西域仏教美術管見 長広 敏雄

西洋史関係

西洋史読書会大会

十一月三日(祝) 於京大楽友会館

エフォロイについて 新村祐一郎

ゴルテュンの法典における女子相続権の位置 伊藤 貞夫

——R. Y. Willets の解釈をめぐって——

Viminacium 会談

長友栄三郎

ヘンリー八世の対ローマ政策 栗山 義信

——その断絶の時点をめぐる——

十六世紀末—十七世紀初のヨーロッパ

関係諸法令について 石戸谷重郎

啓蒙思想におけるヒュウマニズム 五十嵐久仁平

E. Von シュタインの自治思想について 東畑 隆介

三月革命期におけるドイツ統一の問題 末川 清

ゲルヴィヌスとドイツ自由主義の変化 千代田 寛

ブラゴエフ団の性格について 倉崎 繁

東プロイセン州における農業労働力の存在形態 中村 幹雄

ドル外交の形成と米國極東政策の転換 高橋 章

ランドルフ一族とアメリカ革命 今津 晃

地 理 学 関 係

昭和三十七年人文地理学会大会

十一月三日(祝)(於京都大学文学部研究発表

通勤現象における大都市圏の地域関係

——大阪を例として—— 茨木 久重

購買圏の構造 水野 元

熊本県桑園地帯における分布並びに

競合と共存 大迫 輝通

静岡県における農業集落の

地域の展開

——農山漁村集落に関する

人文地理的研究——(予報)

水稲生産力の地域性に関する研究

(第一報)

出稼農村の生態と構造

——福井県南条郡糠浦を例にとつて——

天塩川下流の河畔地形と土地利用

(予報)

Company Town としての

近代鉱山町の形成

鉱山周辺農村における農業問題

喜界島の村落

沖繩における耕地分散

共同調査：八重山群島の地理学的研究

(第一報)

(1)経済構造の一断面

(2)交通通信構造

(3)村落の社会構造

(4)村落の形態と住居をめぐる諸問題

——民家形式の概況報告——

——南西諸島における居住様式の研究(1)

——小川 徹・林 宏・早瀬哲恒

沖繩群島久米島における民家型式の諸相

郡地名と上代の郡衙

足利 健亮

細井 淳孝

青木千枝子

末尾 至行

龍瀬 良明

川崎 茂

河野 通博

池野 茂

浮田 典良

喜界島の村落

沖繩における耕地分散

共同調査：八重山群島の地理学的研究

(第一報)

(1)経済構造の一断面

(2)交通通信構造

(3)村落の社会構造

(4)村落の形態と住居をめぐる諸問題

——民家形式の概況報告——

——南西諸島における居住様式の研究(1)

——小川 徹・林 宏・早瀬哲恒

沖繩群島久米島における民家型式の諸相

郡地名と上代の郡衙

足利 健亮

小川 徹

林 宏

早瀬哲恒

杉本 尚次

武岡輝行

武岡輝行

武岡輝行

武岡輝行

武岡輝行

地名新論

古代ローマにおける一インド観

——Arian の場合—— 金子 康

下総国飯沼新田の戸口について

——孫兵衛新田の場合—— 大角 留吉

近世村落の縁組

——信州小県郡辰の口村を例に——

城下町における未解放部落の一考察

近世の内陸都市と交通路の問題

——中国地方の場合—— 富岡 儀八

シンポジウム「明治時代の地理」(*は発表者)

明治中期におけるわが国工業の

地域的展開

明治時代の工業

岡山県における

工業地域形成について——

明治時代の都市の性格

明治時代の農業

明治時代の行政

明治初期の地方制度を中心に——

明治時代の地理学

人文地理学会第44回例会

十二月十六日(土) 午後一時三十分

於京都大学教養部

飯島の人文地理学的調査概報

成田孝三・小森星児

藤本 利治

井戸庄三・木村辰男

高橋 正・山澄 元

小野 菊雄

煙中 友次

金子 康

大角 留吉

菊池 万雄

西田 彦一

富岡 儀八

松田 孝

藤森 勉

成田孝三・小森星児

藤本 利治

井戸庄三・木村辰男

高橋 正・山澄 元

小野 菊雄

煙中 友次

金子 康

大角 留吉

菊池 万雄

西田 彦一

富岡 儀八

松田 孝

藤森 勉

成田孝三・小森星児

藤本 利治

井戸庄三・木村辰男

高橋 正・山澄 元

小野 菊雄

煙中 友次

金子 康

大角 留吉

菊池 万雄

西田 彦一

富岡 儀八

1、環境・先史・体質

藤岡謙二郎・新田あや
西田彦一

2、集落・民家・生活圏

藤岡謙二郎・桑原公徳
山崎俊郎・広田修
玉置哲郎

3、人口・社会・経済

西村睦男・浮田典良
島田正彦・佐々木高明

考古学関係

E・テリエ氏講演会

九月一七日考古学研究室、地質学教室の主催で、パリ大学教授E・テリエ氏の「築跡の磁性と年代決定」についての講演会をおこなひ、地質学教室の川井直人氏が解説にあたつた。

正誤表

四四巻六号所載書評「R. J. C. Butow:

Tojo and the Coming of the War」(中山治一)に、次の誤植がありましたので、

訂正いたします。

一二七頁下段 本文二行目 書評を↓書評の
四行目 東条英樹↓東条英機 七行目 間

題にかかる↓問題にかかわる

一二八頁上段 二行目 学位論文となつた。*

↓学位論文となつた 下段 二行目 彼の生涯を描き↓彼の生涯を描写。

一二九頁上段 七行目 述べたり↓述べたあたり 一四行目 政治的諸勢力消長↓政治

的諸勢力の消長 終りから三行目 多くのページ教↓多くのページ数。下段 二行目

の提携の関して↓の提携の問題に關して 五行目 のは、はなはだしく↓のには、はな

はだしく 一四行目 まつたく逸しられ

一三〇頁上段 一二行目 優位ということを↓優位ということと 下段 七行目 点の

ひとつがある。↓点のひとつがある 九行目 なお本書が、↓なお本書は、

一三一頁上段 一二行目 「その人(東条)の運命」↓「その人(東条)の運命」 一

六行目 刊行されている。↓刊行されている

なお三七頁 執筆者紹介「中山治一 大阪大学教授」とあるのは「大阪市立大学教授」の誤り。

編集後記

まず大巾に発行の期日がおくれてしまひましたことを、おわびいたします。印刷事情の悪化は、すでに御高承のことと存じますが、一つ掛け損ねたボタン穴は何とやら、なかなか立直りません。三号迄には何とか正常の状態にしたいと考えて居ります。

本号には、特にお願いして、名誉会員那波利貞先生に御寄稿いただきました。先生は八月には七三歳を迎えられますが、近時ますます盛んな御活躍でありまして、一層の御長寿を皆様とともに祈りする次第であります。なお、本誌掲載の論文その他の順序は、特別のものを除いて、日本史・東洋史・西洋史・地理学・考古学の順になつて居り、いわゆる巻頭論文制はとつて居りません。先に、この欄でもお知らせしましたが、今一度、念のため申し添えます。(横山裕男)

一九六二年二月二五日印刷 定価 二百円
一九六二年一月一日発行

史林 (第四五巻第一号)

発行所 史学研究会

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

理事長 宮崎市定
編集主任 赤松俊秀

印刷所 中村印刷株式会社

京都市下京区西七条御所ノ内東町三九